

近世後期の街道筋における棒の用途と身体技法

| | |
|------|---|
| 著者 | 谷釜 尋徳 |
| 著者別名 | TANIGAMA Hironori |
| 雑誌名 | スポーツ健康科学紀要 |
| 巻 | 14 |
| ページ | 1-17 |
| 発行年 | 2017-03 |
| URL | http://id.nii.ac.jp/1060/00008878/ |



近世後期の街道筋における棒の用途と身体技法

谷 金 尋 徳¹⁾

The use of staves and techniques of the body on thoroughfares in the late modern period

TANIGAMA Hironori

Summary

This study discusses the use of staves and techniques of the body on thoroughfares in the late modern period. The study's findings can be summarized as follows :

1. For a male traveler, a cane did not serve as a walking aid. For a female traveler, a cane represented a walking aid or a fashion accessory.
2. People engaged in the transport of goods on roads (express messengers, palanquin bearers, street vendors) all used staves or poles to carry a load on one shoulder while running or walking. This body technique led to less fatigue when transporting a load.
3. When people using thoroughfares stopped to rest, they used staves to support themselves and their baggage.

1. はじめに

「もしこのままにしておいたら、たいていの人は忘れるであろう。そうして前代日本人の、いろいろの苦心と経験とが、わからなくなるであろう。」¹⁾ 民俗学者の柳田國男が「棒の歴史」という論稿の中で書き残した言葉である。古来より日本人は、一本の「棒」を杖にしたり、物を引っ掛けて運んだり、休息時の便利グッズにしたりと、巧みに使いこなしてきた歴史を持つ。「細長い木・竹・金属などで、ふつう手に持てるほどの大きさのもの。」²⁾と説明される似た形状の道具を用い

ながらも、そこには用途に応じた合理的な棒の操り方が存在した。かつての日本人は、棒をめぐる多様な身体技法³⁾を習得していたのである。

この傾向は、特に近世後期の街道筋で顕著であった。全国津々浦々からおよそ6人に1人の割合の日本人が伊勢神宮を目指し歩いて旅した時代⁴⁾、旅人の1日あたりの歩行距離は平均で35km前後、長い時には70kmにおよぶこともあった。東北地方からの伊勢参宮を例に取れば、一般庶民がこの距離を通常3～4ヵ月間歩き続けているので、近世後期の日本人はおしなべて現代人よりも健脚であったと考えてよい。近世後期の街道筋で

1) 東洋大学スポーツ健康科学(白山キャンパス)研究室 〒112-8606 東京都文京区白山 5-28-20

Sports and Health Science Laboratory, Toyo University, 5-28-20, Hakusan, Bunkyo-ku, Tokyo, 112-8606, JAPAN

育まれた類稀な歩行文化が、「棒」という至ってシンプルな道具にバラエティに富んだ使い道と身体技法を見出していったといえよう。

こうした日本人の民族性に根差した運動文化は、現代の日本ではリアルタイムで確認することは難しく、かつて柳田が懸念したように今や忘れられた身体技法であるといわねばならない。しかし、国際化をますます志向する今日にあって、「日本人とは何か」をスポーツ史的に考察しようとする時、古来の日本人が経験の蓄積を通して生み出した身体技法の再構成は一つの手掛かりとなろう。そこで本稿では、近世後期の街道筋における棒の用途と身体技法について検討を加えるものとした。

いにしへの道具や身体動作を知るための歴史資料として、本稿では文書史料と並んで絵画や写真などの図像史料も積極的に活用する。史料としての図像の扱い方については、パノフスキー⁵⁾、ストラテン⁶⁾、バーク⁷⁾、黒田日出男⁸⁾らが提示する方法論から多くの示唆を得た。

近世日本も視野に収め、「棒」という道具と身体技法の問題に着目した主な先行研究として、柳田國男の「棒の歴史」⁹⁾と川田順造¹⁰⁾の『運ぶヒトの人類学』をあげることができる。いずれも本稿の着想の原点となる論稿であるが、棒を用いた「運搬」の解明に主眼が置かれている。そこで本稿では、街道筋の棒の用途と身体技法を運搬の場面に限らず拾い上げて素描することにした。対象とする棒の用途は、杖・運搬・休息の3パターンである。

ところで、岩村によると、歴史研究とは「本質的には変化の研究である。」¹¹⁾という。ゆえに、これを親科学とするスポーツ史の研究も、何がしかのスポーツ現象の「変化」を時間軸に乗せて解き明かすことを目指さねばならない。しかし、街道筋の棒の用途や身体技法の変化を客観的に把握し

得る分量の史料を、近代以前の研究に期待することは控えめに言っても困難である。そのため、本稿は近世後期という時代区分の中で、当該事象の全体像をできるだけ鮮明に浮かび上がらせる意図で記述されていることを予め断っておきたい。

2. 杖としての棒の用途と身体技法

2-1 杖の携行率

近世後期の街道の模様を描いた浮世絵には、杖を手にした旅人が登場することが多い。ここでは、実際にどの程度の割合の旅人が杖を携えて道中を歩いていたのか、絵画史料の分析を通して見当をつけてみたい。

杖の携行率を探るために用いるのは、近世後期にかけて数多く出版された名所図会の類である。名所図会とは「実景描写の挿画を多数加えた地誌風な読み物」¹²⁾のことであるが、その写実的な挿絵には名所旧跡などの風景のみならず旅人の装いも事細かに描き込まれているからである。原則として、名所図会には話しの筋立てがなく¹³⁾、その挿絵にも物語性が介在する余地は少ないので、他種の絵画史料と比べて当時代の旅装がそのままに近い姿で描写されていると解釈してよい。従前の研究は、ここに名所図会の史料価値を見出してきた¹⁴⁾。

本稿では数ある名所図会の中から、挿絵の中に旅人の姿が比較的多く描き込まれているという理由で、『拾遺都名所図会』（1787）『東海道名所図会』（1797）『伊勢参宮名所図会』（1797）『江戸名所図会』（1834）を抽出した。分析対象とした挿絵は、各名所図会におけるすべての挿絵の中から、旅人の姿が描かれていて、なおかつ杖の携行も含めた旅装が肉眼レベルで判別し得るものである（例えば図1）。

上記の諸前提に基づいて、名所図会に描かれた旅人の杖の携行状況を整理したものが表1であ



図1 旅人の杖携行の様を描いた名所図会の挿絵
 蒨関月編・画「伊勢参宮名所図会」(1797)『日本名所図会全集11』名著普及会、1975

表1 名所図会にみる旅人の杖携行の割合

| 史料名 | 旅人の人数(人) | | | 杖の携行 | | | | | |
|----------|----------|----|-----|------|-------|----|-------|-----|-------|
| | 男性 | 女性 | 計 | 男性 | | 女性 | | 計 | |
| | | | | 人数 | 割合 | 人数 | 割合 | 人数 | 割合 |
| 拾遺都名所図会 | 53 | 10 | 63 | 18 | 33.9% | 6 | 60.0% | 24 | 38.0% |
| 東海道名所図会 | 25 | 4 | 29 | 4 | 16.0% | 3 | 75.0% | 7 | 24.1% |
| 伊勢参宮名所図会 | 202 | 53 | 255 | 68 | 33.6% | 32 | 60.3% | 100 | 39.2% |
| 江戸名所図会 | 71 | 14 | 85 | 12 | 16.9% | 6 | 42.8% | 18 | 21.1% |
| 合計 | 351 | 81 | 432 | 102 | 29.0% | 47 | 58.0% | 149 | 34.4% |

※上記の表は、次の名所図会を参考に行っている。

秋里籬島編・竹島春朝斎画「拾遺都名所図会」(1787)『日本名所図会全集13』名著普及会、1975

秋里籬島編・竹島春朝斎ほか画「東海道名所図会」(1797)『日本名所図会全集5, 6』名著普及会、1975

蒨関月編・画「伊勢参宮名所図会」(1797)『日本名所図会全集11』名著普及会、1975

斎藤月岑ほか編・長谷川雪旦画「江戸名所図会」(1834)『日本名所図会全集1～4』名著普及会、1975

る。これによると、男性の杖の携行率が高くても3割程度であることから、男性は思いのほか杖を常用していなかったことが窺える。近世の旅人が用いた杖として、庶民層に流行した西国巡礼の「巡礼杖」や、四国八十八ヵ所で道者が弘法大師

の象徴として手にした「遍路杖」があったが、いずれも歩行運動のサポートの意味合いよりも宗教的な色彩を帯びたものであった¹⁵⁾。また、近世には若者や遊里通いの男性の間で「伊達に持つアクセサリー」¹⁶⁾として杖が幾度となく流行したこと

があったので、男性の旅人の中にはファッション感覚でお洒落のために杖を携行した者も一定数含まれていたと推測される。ともあれ、近世後期における男性の旅人にとっての杖は、歩行を補助する道具としてはさほど機能していなかった可能性を指摘しなければなるまい。

一方、名所図会に描かれた女性の杖の携行率は男性よりも明らかに高い数値を示している。女性が連日に及んで長距離を歩くためには、歩行の助けとなる杖は必要不可欠な道具だったと考える。近世後期の東北地方からの伊勢参宮を引き合いに出すと、女性の1日平均の歩行距離は男性よりも著しく短い（男性約34.9km/女性約28.6km）¹⁷⁾。だからといって、女性の杖携行の目的が歩行の補助のみにあったと見なすことは早計であろう。女性が男性よりも旅装の美的側面に気を配っていたとすれば、杖の携行もお洒落の一環であったと考えねばならないからである。

ところで、旅人はどのようにして杖を手に入れたのであろうか。都市の貨幣経済が街道筋にも浸透していた近世後期には、旅人は道中の大半の事柄を金銭によって解決することができた。そのため、杖を手に入れる際にも何らかの方法で「購入」していたと推測される。旅人の物品購入状況を知り得る恰好の史料が、旅人自らが道中の行動を記録した「旅日記」である。旅日記の中には、道中の訪問地や行動と併記して金銭の使い道がつぶさに書き込まれている場合がある。

筆者が従来確認し得た旅日記の数は、伊勢参宮の史料に限っても100編を超えるが、その中に道中の杖の購入履歴が記載されたものが1編存在した。文化7（1810）年に鍛冶屋村（神奈川県湯河原町）から伊勢参宮の旅をした柏木何某という農民男性の旅日記（表題不明）である。同史料には、松坂宿（三重県松坂市）の地点で「五十文杖代」¹⁸⁾とあり、50文で杖を購入したことが明記

されている。

それでは、旅人はどこで杖を購入したのであろうか。旅日記の文面からはそれを窺い知ることはできない。名所図会をはじめとする近世後期の浮世絵から、杖の販売に関する描写を探し当てることはできず、店舗で販売していたのか、路上に売り子が存在したのか、あるいは旅籠や茶屋で訪問販売が行われていたのか、実際のところは不明である。

筆者がこれまで蒐集した旅日記の中で、杖の購入記録が確かめられるのは上記の史料のみである。史料に記録がないことをもって当該事象がなかったと断ずるのは早計であるが、当時の街道筋では杖は金銭を媒介して手に入れる類の物品ではなかったのかもしれない。

2-2 旅人の歩行の身体技法

次に、杖を手にした旅人の歩行が、どのような形態をもって行われていたのかを検討したい。

近代以前の日本人は「ナンバ」の姿勢で歩いていたというのが、現在のところ通説になっている感がある。今日の日本人が歩行する際、右足が出ると左手が前に出るという体を捻った姿勢の連続が通常であるが、ナンバの歩行は同側上下肢が同時に出る身体技法であるという¹⁹⁾。

ナンバの歩行を説明する際、頻繁に引用されるのが演劇評論家の武智鉄二による下記の文章である。武智はナンバの歩行を農耕生産における「半身」の姿勢と結びつけて理解している。

「日本民族のような純粋な農耕民族（牧畜を兼ねていない）の労働は、つねに単え身でなされるから、したがって歩行のときにもその基本姿勢（生産の身ぶり）を崩さず、右足が前へ出るときは、右肩が前へ出、極端に言えば右半身全部が前へ出るのである。（中

略) ナンバ歩きに、手を振るという説明は、正しくない。農民は本来手を振らない。手を振ること自体無駄なエネルギーのロスであるし、また手を振って反動を利用する必要がある、農耕生産にはない。」²⁰⁾

武智のナンバ論は決定的な史料に裏付けられたものではなかったが、後に続く研究の多くは悉く武智の見解に依拠していった。近代以前の日本人が腕を振らない「半身」の姿勢で歩いていたという確証はいまだ得られていないが、かつての日本人が今日とは異質の歩行文化を持っていたとする点は、ナンバの歩行に言及してきた識者に共通している。

歩行という至って日常的なしぐさを当時の日本人が書き留めることは稀であったが、異文化の民からすると、それは記録に値する現象だったようである。幕末～明治初期の訪日外国人は当時の日本人の歩行に関して、足を引きずって歩くこと、歩行の際に音が生じること、爪先で歩くこと、前傾姿勢で歩くこと、小股・内股で歩くこと、歩行の様態が奇妙であること、といった特徴を共通して見聞録に認めているからである²¹⁾。しかし、これらの共通認識は日本人の日常生活を切り取ったもので、非日常たる旅の世界でも同様の歩行の特徴が見られたとは限らない。当時の日本人の歩行運動は、日常的に着用する着物や履物に強く規制されていたが、これを緩和すべく、旅人は動きを妨げる着物の裾をまくり上げ、草履とは異なり踵が台座に固定される草鞋を履いて長距離の歩行に臨んでいたことを、訪日外国人は見逃さずに書き留めていた²²⁾。したがって、旅人の歩行運動は着衣から受ける規制から幾分解放されていた可能性がある。

このように、旅人の歩行の特徴を正確に捉えられない以上、彼らが杖を手にした際の身体技法を

鮮明に浮き彫りにすることもまた、困難を極めるといわねばならない。

3. 運搬における棒の用途と身体技法

日本の絵巻物や屏風絵に描かれた運搬法の調査によると、平安末期～室町中期は頭上運搬が20%、肩運搬が40%、背負い運搬が40%であったものが、江戸後期にかけては頭20%、肩55%、背25%となり、肩運搬の比率が著しく高まったことが報告されている²³⁾。多くの場合、肩で担ぐ運搬には棒が用いられたことを思えば、近世の運搬は「棒」を抜きにして語ることができないといえよう。

川田によると、日本の棒を用いた肩運搬には「棒の片端に、軽い荷をつけて一人で肩にかつぐ」「棒の中央に重い荷をつけて前後二人でかつぐ」「棒の両端に重い荷をつけて、一人でかつぐ」の3パターンが存在したという²⁴⁾。そこで以下では、この3類型を具体的な運搬形態に当てはめ、運搬時の棒の用途と身体技法を検討していくことにしたい。

3-1 飛脚の物資運搬における棒の用途と身体技法

街道筋において、川田のいう「棒の片端に、軽い荷をつけて一人で肩にかつぐ」運搬を実践していたのは、「文書・金銭・小貨物などを送達する使いや人夫」²⁵⁾としての飛脚である。近世の飛脚には、騎乗して馬荷を輸送する「宰領飛脚」と、自らの足を頼りに荷物運搬を請け負う「走り飛脚」が存在したという²⁶⁾。本稿で取り上げるのは、走り飛脚の方である。この走り飛脚にしても、必ずしも走行するばかりではなかったが、本稿では彼らの走行場面に見られた身体技法を取り上げる(図2～4)。

飛脚の運搬においては、片端に荷物を括り付け

た棒を斜めに肩にかけることが通常の走行姿勢であった。柳田はこの運搬法について、背負い運搬との比較から「物を背に負う者が一歩々々、足を踏みしめて道をあらく習いであるに反して、この方（飛脚の運搬形態—引用者注）は奇妙に早足で行くことができた。」²⁷⁾と指摘する。飛脚の走行とは、短時間での荷物運搬を達成するための合理的な身体技法であったといえよう。

近世日本における「走行」運動がある種の特徴技能であった点を踏まえ、飛脚の走行の身体技法に触れたのが武智鉄二であった。先に引いたように、武智は近世の日本人の歩き方は半身姿勢に基づくナンバであったと論じたが、飛脚の走行については「飛脚が走ることがあるが、このときも、足を後へ高くあげ、手を横に振り、ナンバの姿勢のままで走る。」²⁸⁾「日本の伝統的な駆け足には、ストライドもなく、遠心力の利用もなく、また加速のために手をふるような補助行為もない。」²⁹⁾などと解説した。これにしたがえば、飛脚は半身（ナンバ）の姿勢を保って走っていたことになり、足を前方に大きく踏み出したり、腕を前後に振って反動を得たり、遠心力を利用してカーブするような動作は見られなかったことになろう。

近世の浮世絵（図2～4）と照合してみると、武智の見解が真実味を帯びてくる。静止画像からは飛脚の走行の運動経過を正確に抽出することはできないにしろ、描き手が異なる複数の絵画史料には、半身で「足を後へ高くあげ」て走る飛脚が共通して描写されているからである。これが、当時の画家の間に浸透していた走行場面を示すコード表現（約束事）であった可能性は否めないが、飛脚もまた現代人とは異質な走行の身体技法を持っていたと考えてよい。

その一つが「片踏み」という走行の身体技法である。小田伸午によれば、片踏みとは「半身姿勢を保ったまま、片方の脚で身体を押し進め、反対



図2 飛脚の走行①

「東海道五拾三次之内 平塚」（1833）『保永堂版 広重東海道五拾三次』岩波書店、2004

の脚でバランスをとるような感じの動き」³⁰⁾であるという。左右の足は同じ歩幅であるが、半身姿勢のまま走行するため前方の足が大きく前に振り出されることになる³¹⁾。半身姿勢を維持するという点では、武智の見解を下支えするものとなる。

図2～4を見る限り、飛脚の走行運動が着物から著しい制限を受けていたとは考え難いが、履物（草鞋）から受ける影響は大きかったようである。小田は、飛脚が着用した草鞋が「蹴らない」走行を必然化し、彼らの半身姿勢による足運びは「踏みつけて乗ってゆき、さっと離れる動き」であったと類推している³²⁾。日本古来の走歩行の動作が履物に影響を受けていたことは、かねてから柳田國男が指摘していた³³⁾。なお、この半身の走法は疲労軽減の効果があったという³⁴⁾。

近世の飛脚は疲労軽減のための工夫を施していたと伝えられている。例えば、走行時に次々と目標物を変えること、調子を乱さないように呼吸を整えること（通常は息を1度吸って1度吐くが、速度が上がると2度吸って2度吐く）、転倒防止



図3 飛脚の走行②

「熙代勝覧」(1805)『大江戸日本橋絵巻「熙代勝覧」の世界』講談社, 2003



図4 飛脚の走行③

葛飾北斎画「富士百選 暁ノ不二」(近世後期)『江戸の旅と交通』学習研究社, 2003

や走行のリズムが不規則にならないように路面の小石等を踏まないこと, などを重視したという³⁵⁾。

史料的な限界から, 飛脚の走行能力を客観的に裏付けるまでには至らないが, 棒の片側に荷物を括りつけた状態での走法の身体技法が一部分明らかとなった。

3-2 駕籠運搬における棒の用途と身体技法

近世の棒運搬のうち, 川田が「棒の中央に重い荷をつけて前後二人でかつぐ」³⁶⁾と分類した方法の代表例が駕籠運搬である。ここでは, 街道筋で旅人を駕籠に乗せて走った「駕籠かき」の身体技法を検討することにした。

駕籠かきの走法は, 先の飛脚と同様に半身姿勢を保った片踏みであった。織田は駕籠運搬の特徴



図5 箱根山中の駕籠かき

ポンティング「この世の楽園・日本」(1910) 長岡祥三訳『英国人写真家の見た明治日本—この世の楽園・日本—』講談社, 2005

を以下のように説いている。

「両足を交互に前に出すのではなく、つねに一方の足を前方、もう一步の足を後方に置くことで、半身姿勢を維持していくという走りの形態である。これがなぜ効率的なのか。ひとつには駕籠の揺れを最小限に留めることができ、したがって中の客人が揺れに悩まされることも少ない。さらに、それによって、駕籠かき職人の肉体的負担が軽減されることに尽きるだろう。」³⁷⁾

半身姿勢で棒を担ぐ片踏みとは、駕籠の揺れを抑制するばかりか担ぎ手の身体の負担を軽減する効果的な走り方であったことがわかる。

駕籠運搬の身体技法をつぶさに観察し、日記に書き留めた人物がいた。アメリカ人の人類学者フレデリック・スタールである。スタールは大正4(1915)年に一人旅を決行した際、箱根山中で乗った駕籠について『山陽行脚』に下記のような見聞録を残している。この見聞は大正期のもので

あったが、ほぼ同時期にイギリス人写真家のポンティングが撮影した箱根山中の駕籠の模様から(図5)、当時はまだ近世的な駕籠運搬の形態が維持されていたと考える。

「前と後の駕籠やの頭の間、一の仮説線を引いて見ると、この線は、道の伸びて居る方向とは平行しては居らぬ。むしろ対角線の関係になつて居る。だから乗つて居る客は、顔の向いて居る方向にすゝまないで、蟹のやうに、四十五度の角度で、横にむかつて進行する結果となるであらう。」³⁸⁾

スタールの実体験に基づく分析は、駕籠かきの身体技法を知る上で大きな示唆を与えるものである。前後の駕籠かきを結んだ仮想線は街道と「対角線の関係」にあり、駕籠の中にいたスタールにとっては「四十五度の角度で、横にむかつて進行する」感覚を抱かせたようである。前述のように、駕籠かきが半身姿勢を保った片踏みの走法を実践していたとすれば、スタールの見聞録は腑に



図6 絵画史料に描かれた駕籠かき
十返舎一九著・歌川国丸画「諸国道中金草鞋 十三編 善光寺参詣草津道中」(1828)
『諸国道中金の草鞋 (13)』みやま文庫, 1989

落ちる部分を含んでいる。彼らが半身姿勢を維持して街道を直進するにあたっては、進行方向に対して駕籠にある程度の角度を付けるようにして担ぐことが無理のない動作ではなかったか。

スタールの眼差しは、駕籠の走行角度の観察に止まるものではなかった。以下に引用する彼の見聞録は、欧米的な運動文化との比較において、駕籠かきの走行の身体技法を相対的に浮き彫りにした証言である。

「私はまだこの息杖ほど、構造の簡単にして、然もその用途の万能なるものを見たことはない。駕籠屋は一步步に、息杖を地につき立て、行く。これは何等か巧妙なる方法によりて、担ひ棒から肩当て、肩当てから肩、肩から脚へと移行する重みを分解して、他に放散せしむる仕掛けであらう。と云つて、私の見たところでは、別に重みが息杖にかゝつて行くらしく思はれぬから、ますます珍妙と云ふべきである。それから杖の振り工合だが、これが又なく面白い。それはわれわれが

歩く時手を振るごとく、前後に振られるのではなく、むしろ左右に、脚下から肩の辺まで、半円形に振らるゝのである。これが一足ごとに、器械的に繰返されるのだから、頗る奇観である。そしてこれと同時に、駕籠やの逞しい両脚は、振れつ絡れつするやうに見える。決して普通われわれがなす如く、真つ直に脚を、まへの方に運搬するのでは無い。これは矢張り脚で半円を描いて、其の間にどこかで、勢力を経済しやうとする工夫に相違ない。すなはち息杖と同一の原理に支配されて居るのであらう。」³⁹⁾

上記引用文は、大きく3つのポイントに分かつことができる。一つは息杖の効果である。息杖とは駕籠かきが持つ一本の棒のことで(図5、6参照)、街道筋ではこれが駕籠かきの必須アイテムであった⁴⁰⁾。彼らは一歩進むごとに息杖を地面に突き立てていたが、この運動が駕籠から受ける加重を分散させる役割を果たしていたとスタールは類推している⁴¹⁾。

また、走行時の杖(腕)は左右に半円を描くように振られていたとし、これが歩行時に腕を前後に振る慣習を持つ欧米人のスタールをして「奇観」だと評せられた。武智は近世日本の走法の特徴として腕を前後ではなく横に振る点をあげているが⁴²⁾、スタールの見聞録はこのことを裏付ける証左の一つとなろう。

半身姿勢を保って足の前後関係を崩さない片踏みの走法を目の当たりにしたスタールは、「普通われわれがなす如く、真つ直に脚を、まへの方に運搬するのでは無い」ことに気が付き、「駕籠やの逞しい両脚は、振れつ絡れつするやうに見える。」と表現した。また、片踏みの走法は、スタールにとっては半円を描いているように見え、これが息杖と同一の軌道であったために「勢力

イコノマイズ
を経済しやうとする工夫」だと考えたようである。前述したように、片踏みは身体的な負担を軽減する走法であったとされるが、スタールの異文化からの眼差しはこの効能を見抜いていたといえよう。

3-3 両天秤運搬における棒の用途と身体技法

街道筋では、旅人の従者（図7）や現地の労働者（図8）が荷物運搬のために天秤棒を担いでいた。川田がいう「棒の両端に重い荷をつけて、一人でかつぐ」用途である。天秤棒担ぎの身体技法も、これまで考察してきた飛脚・駕籠かきと同様に半身姿勢を保った片踏みであった。

天秤棒担ぎにおける片踏みについては、民俗学者の高取正男が以下のように詳細に解説している。

「右で担ぐときは右肩を前に出して半身にかまえる。左足で地面を蹴って右足を前に踏みだすとき、左手を後に振ってはずみをつけ、右腰、右肩、右手を前に押しだし、このほうに力をいれて進む。（中略）西洋風に左足と右手、右足と左手を交互に前に出して歩いたら、いっぺんに腰がぬけ、荷物の重さにふりまわされ、身体の重心さえとれなくなる。右が得手なら右肩で棒を担ぎ、右足といっしょに右肩と右手を前に出す。半身にかまえ、右の腰を基軸に右足と右肩を同時に主導させ、右、左、右、左、と歩くと、棒のバネと腰のバネがはじめて一致し、重心が安定する。」⁴³⁾

このように「西洋風」の身体技法では天秤棒の重みに耐えかねるが、半身姿勢のまま前方の腰を基軸に進行することでバランスのとれた棒運搬が達成されるのだという。



図7 天秤棒を担ぐ従者

十返舎一九著・歌川国丸画「諸国道中金草鞋 十三編 善光寺参詣草津道中」（1828）『諸国道中金の草鞋（13）』みやま文庫，1989



図8 街道筋で天秤棒を担ぐ労働者

十返舎一九著・歌川国丸画「諸国道中金草鞋 十三編 善光寺参詣草津道中」（1828）『諸国道中金の草鞋（13）』みやま文庫，1989

また、川田が「日本人の両天秤運搬では、天秤棒がしない、歩くにつれて、荷をつけた両端が軽く上下に揺れることによって、荷重全体は変わらなくとも、肩に感じられる重圧感が間歇的になる。」⁴⁴⁾と指摘するように、日本古来の天秤棒には

抜重の工夫が施されていた。柳田も同様に、「これ（天秤棒―引用者注）は担って行く者の足取りにつれて、両端が少しずつ上下に動き、その僅かの間だけ、肩を休めるように出来ているので、そういう動作のために荷物の吊縄がすべり落ちないように、丈夫な小さな突起が、棒の両端についているのである。」⁴⁵⁾と述べている。この「小さな突起」は図8の絵画を見れば判然とするが、棒の上下動による抜重を可能にしたという点で特筆すべき機能であったといえよう。

次いで、天秤棒担ぎにおける片踏みの身体技法について、訪日外国人の見聞録を引いておこう。明治初頭に来日したオーストリアの外交官クライトナーは、道端で遭遇した陶器や食料を運搬する「山間地の住民」の見聞録を次のように書き留めている。文面から判断するに、おそらくは天秤棒の担い手を観察したものであろう。

「荷物を担いでいる人たちは、裸に近い恰好だった。肩に竹の支柱をつけ、それにたいへん重い運搬籠を載せているので、その重みで支柱の竹筒が今にも割れそうだった。彼らの身のこなしは、走っているのか歩いているのか見分けのつかない態のものである。（中略）彼らは歩きながらも、締めつけられた胸の奥から仕事の歌を口ずさむ。喘ぎながらうたう歌は、左足が地面につく時、右足が大股に踏み出す力を奮いたたせる。」⁴⁶⁾（下線、引用者）

ここでは下線部に注目したい。クライトナーが見た飛脚は、右前の半身姿勢で右足を「大股」に振り出して左足を後方につける片踏みを実践していたと読み取ることができる。前出の高取の引用で、右前の半身で天秤棒を担ぐ際には「左足で地面を蹴って右足を前に踏みだす」と解説されてい

る点と符合する。

以上、棒を用いた肩運搬の身体技法について検討してきた。飛脚、駕籠かき、天秤棒担ぎの運搬に共通しているのは、いずれも半身姿勢を維持した片踏みの走歩行を実践していて、その身体技法が運搬時の疲労軽減の役割を果たしていたということである。したがって、近世後期の街道筋における棒を用いた肩運搬は、片踏みの身体技法を下敷きにして発達したといえよう。

4. 休息の用途と身体技法

近世の街道筋における棒は休息のためのアイテムとしても重宝され、それに応じた身体技法が存在した。

4-1 旅人の棒を用いた休息の身体技法

近世後期の街道筋を描いた絵画史料の中には、棒を巧みに用いて立ち止まって休息する旅人の姿が散見される。図9～12は、『江戸名所図会』における当該場面のいくつかを部分的に切り取ったものである。身体の正面に突き立てた杖に体重をかけ、がに股で休息する旅人が描かれている。また、『拾遺都名所図会』には『江戸名所図会』と類似した姿勢で休む旅人の隣りに、杖を身体の横に突いて休息する旅人の姿も確認されるが（図13）、杖に寄り掛かって休むという共通項が見出される。

明治30年代の日本を写したイギリス人のボンテイングの写真集を見ると、この身体技法が「絵空事」ではなかったことがわかる。図14は地藏の前で立ち止まる旅人を撮影したものであるが、この旅人の姿は杖の位置や足の開き方からいっても、上記の絵画史料と酷似しているからである。近世後期の街道筋では、こうした杖を用いた休息の身体技法が一般化していた可能性が窺えよう。



図9 杖を支えに休息する旅人①
斎藤月岑ほか編・長谷川雪旦画「江戸名所図会」(1834)『日本名所図会全集1』名著普及会, 1975



図10 杖を支えに休息する旅人②
斎藤月岑ほか編・長谷川雪旦画「江戸名所図会」(1834)『日本名所図会全集3』名著普及会, 1975



図11 杖を支えに休息する旅人③
斎藤月岑ほか編・長谷川雪旦画「江戸名所図会」(1834)『日本名所図会全集4』名著普及会, 1975



図12 杖を支えに休息する旅人④
斎藤月岑ほか編・長谷川雪旦画「江戸名所図会」(1834)『日本名所図会全集4』名著普及会, 1975

4-2 肩運搬における棒を用いた休息の身体技法

次いで、街道筋の肩運搬における休息姿勢について検討したい。このうち、飛脚が棒を利用して

休む姿は絵画史料において確認し得なかったため、これを検討の対象から除外している。

図15～18には、駕籠かきおよび天秤棒担ぎの立位での休息場面が描かれている。休息の度に荷物



図13 杖を支えに休息する旅人⑤

秋里籬島編・竹島春朝斎画「拾遺都名所図会」
(1787)『日本名所図会全集13』名著普及会、1975



図14 杖を支えに休息する旅人⑥

ボンディング「この世の楽園・日本」(1910)長岡
祥三訳『英国人写真家の見た明治日本—この世の楽
園・日本—』講談社、2005



図15 杖を支えに休息する駕籠かき①

蔭関月編・画「伊勢参宮名所図会」(1797)『日本名所図会全
集11』名著普及会、1975

を地面に下ろしてしまうと、再び歩みは始める際
には荷物を肩口まで持ち上げる力を使わなければ
ならない。そこで古来の日本人は、効率の良い休
息の身体技法を編み出していた。すなわち、立ち
止まって休む際には、肩に担ぐ運搬用の棒の下に

息杖を潜り込ませて支えにし、さらなる歩行に備
えていたのである。前出のスタールが見た駕籠か
きの息杖は、走行時のみならず休息時にも大きな
役割を果たす道具だったといえよう。

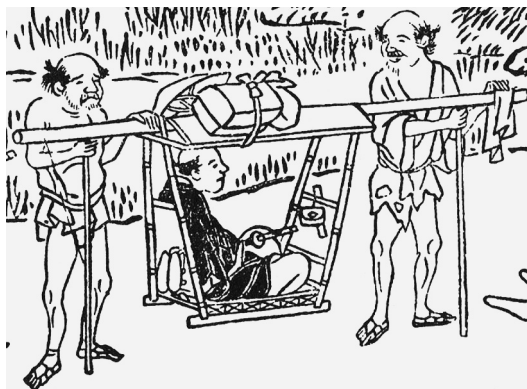


図16 杖を支えに休息する駕籠かき②

部関月編・画「伊勢参宮名所図会」(1797)『日本名所図会全集11』名著普及会, 1975



図17 杖を支えに休息する天秤棒担ぎ①

秋里籬島編・竹島春朝斎ほか画「東海道名所図会」(1797)『日本名所図会全集5』名著普及会, 1975

4-3 背負運搬における棒を用いた休息の身体技法

本稿では、棒を用いた運搬法として肩運搬に照準を絞ったが、街道筋で荷物を背負って運ぶ人々も、休息の際には棒を巧みに使うことがあった。

図19は『東海道名所図会』の挿絵の中から、大きな荷物を背負った男たちが立ち止まって休憩している場面である。3人とも、地面に突き立てた棒の上に荷物を乗せる格好で、再度の歩行に備えている。『伊勢参宮名所図会』の挿絵にも同様の



図18 杖を支えに休息する天秤棒担ぎ②

部関月編・画「伊勢参宮名所図会」(1797)『日本名所図会全集11』名著普及会, 1975

身体技法で休む者たちが描かれている(図20)。図19の画中左側には、遅れてやって来た背負運搬の男性が描かれているが、右手にはT字状の棒を持っていることがわかる。おそらくは、休息時に大きくて重い荷物を支えるために、この形状の棒を持ち歩いていたと考えられる⁴⁷⁾。

このように、街道筋では立ち止まって休息する際、人体や荷物を支えるために棒が用いられ、それに応じた身体技法が存在していたことがわかる。

5. おわりに

本稿は、近世後期の街道筋における棒の用途と身体技法について考察したものである。検討の結果は、以下のように整理することができる。

1. 近世後期の男性の旅人にとって、杖は歩行を補助する道具としての役割は果たしていなかったが、女性にとっての杖とは歩行の補助およびお洒落の意味合いを含んでいた。また、旅人が杖を手にした際の歩行の身体技法を突き止めることはできなかった。

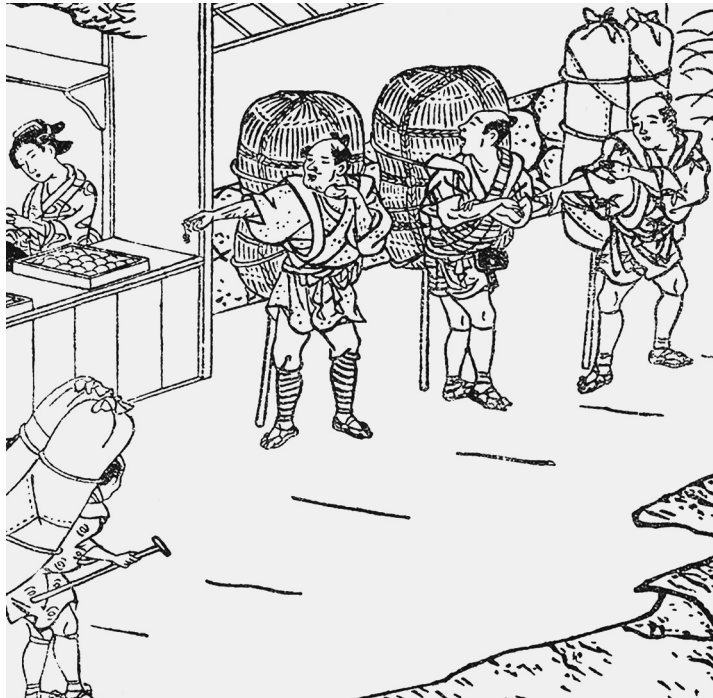


図19 杖を支えに休息する背負運搬の労働者①

秋里籬島編・竹島春朝斎ほか画「東海道名所図会」(1797)『日本名所図会全集 5』名著普及会, 1975



図20 杖を支えに休息する背負運搬の労働者②

部関月編・画「伊勢参宮名所図会」(1797)『日本名所図会全集11』名著普及会, 1975

2. 飛脚, 駕籠かき, 天秤棒担ぎの棒を用いた肩運搬では, いずれも半身姿勢を維持した片踏みの走歩行を実践していて, その身体技法が運搬時の疲労軽減に繋がっていた。
3. 街道筋では立ち止まって休息する際, 人体や荷物を支えるために棒が用いられ, 休息パターンに応じた身体技法が存在していた。

以上より, 近世後期の街道筋では, 「棒」という至ってシンプルな道具に, バラエティに富んだ使い道と身体技法が見出されていたといえよう。

<注記および引用・参考文献>

- 1) 柳田國男「棒の歴史」『なぞとことわざ』講談社, 1976, p.134
- 2) 「棒」北原保雄編『明鏡国語辞典 第二版』大修館書店, 2010
- 3) フランスの社会学者モースは, 日常の習慣的な身体

- 動作には社会的・文化的影響が色濃く反映されていると指摘し、それを「身体技法」と表現した（モース「身体技法」有地亭・山口俊夫訳『社会学と人類学Ⅱ』弘文堂、1976、pp.121-156）。
- 4) 日本全国から参詣のための群衆が一同に伊勢へと押し寄せた社会現象（お陰参り）を例にみると、大規模なものが慶安3（1650）年、宝永2（1705）年、明和8（1771）年、文政13（1830）年に起っている。このうち、文政13（1830）年のお陰参りが最大規模であった。この時に伊勢を訪れた人数は、伊勢宮川の舟番所改帳の写しによれば、3月晦日から6月20日までの間でおよそ427万6500人に達していたという（新城常三：『新稿 社寺参詣の社会経済的研究』塙書房、1982、p.1346）。当時代における日本の総人口は約3000万人、そのうち武士や公家、僧侶などを除いた町方の人口は約2600万人といわれていることから（速水融：『歴史人口学で見た日本』文藝春秋、2001、pp.56-57）、先の数字に従えば文政13（1830）年のお陰参りでは実に日本人の6人に1人が伊勢参宮を行っていた計算になる。
 - 5) パノフスキー著・浅野徹ほか訳『イコノロジー研究』美術出版社、1971
 - 6) ストラーテン著・鯨井秀伸訳『イコノグラフィー入門』ブリュッケ、2002
 - 7) バーク著・諸川春樹訳『時代を目撃者—資料としての視覚イメージを利用した歴史研究—』中央公論美術出版、2007
 - 8) 黒田日出男『姿としぐさの中世史』平凡社、1986／黒田日出男『絵画史料の読み方』朝日新聞社、1988／黒田日出男『歴史としての御伽草子』ぺりかん社、1996／黒田日出男『近世の図像学』『武蔵野美術』117号、2000.8／黒田日出男『図像の歴史学』『歴史評論』606号、2000.10／黒田日出男『絵画史料で歴史を読む』筑摩書房、2004
 - 9) 柳田國男『棒の歴史』『なぞとことわざ』講談社、1976、pp.108-141
 - 10) 川田順造『運ぶヒトの人類学』岩波書店、2014
 - 11) 岩村忍『歴史とは何か』中央公論社、1972、p.55
 - 12) 中村幸彦・岡見正雄・阪倉篤義編『角川古語大辞典 第五巻』角川書店、1999、p.604
 - 13) 林英夫編『日本名所風俗図会 17 諸国の巻Ⅱ』角川書店、1981、p.566
 - 14) 名所図会の史料的な価値を高く評価したものとして、以下の諸論稿をあげることができる。
石川英輔『江戸のまかない 大江戸庶民事情』講談社、2002、pp.50-55／福田アジオ『生活絵引編纂の世界的意義』『非文字資料から人類文化を読み解く』神奈川大学21世紀COEプログラム、2006、pp.36-42
 - 15) 矢野憲一『ものと人間の文化史88 杖』法政大学出版局、1998、pp.190-195
 - 16) 矢野憲一『ものと人間の文化史88 杖』法政大学出版局、1998、p.166
 - 17) 谷釜尋徳「近世後期の東北地方の庶民男女による伊勢参宮の旅のルートと歩行距離」『東洋法学』60巻1号、2016.7、p.110
 - 18) 柏木（某）「（表題不明）」（1810）『湯河原町史 第一巻』湯河原町、1984、p.567
 - 19) 渡会公治「『ナンバ』歩きを考える」『トレーニング・ジャーナル』253号、ブックハウス・エイチデイ、2000.11、p.69
 - 20) 武智鉄二『舞踊の芸』東京書籍、1985、pp.148-149
 - 21) 谷釜尋徳「幕末～明治初期における日本人の歩行の特徴について」『日本体育大学紀要』36巻1号、2006.9、pp.5-11
 - 22) 谷釜尋徳「幕末～明治初期における日本人の歩行の特徴について」『日本体育大学紀要』36巻1号、2006.9、pp.13-14
 - 23) 須藤功編『写真でみる日本生活図引②とる・はこぶ』弘文堂、1988、pp.106-107
 - 24) 川田順造『運ぶヒトの人類学』岩波書店、2014、p.116
 - 25) 「飛脚」『精選版 日本国語大辞典』小学館、2005
 - 26) 巻島隆『江戸の飛脚一人と馬による情報通信史—』教育評論社、2015、p.196
 - 27) 柳田國男『棒の歴史』『なぞとことわざ』講談社、1976、p.131
 - 28) 武智鉄二『舞踊の芸』東京書籍、1985、p.149
 - 29) 武智鉄二『伝統と断絶（新装復刻）』風塵社、1989、p.35-36
 - 30) 小田伸午『運動科学—アスリートのサイエンス—』丸善出版、2003、p.149
 - 31) 木寺英史『本当のナンバ 常歩』スキージャーナル、2004、p.37
 - 32) 小田伸午『運動科学—アスリートのサイエンス—』丸善出版、2003、p.148
 - 33) 柳田國男『明治大正史 世相篇 新装版』講談社、1993、p.53
 - 34) 巻島隆『江戸の飛脚一人と馬による情報通信史—』教育評論社、2015、p.205
ところで、近世の飛脚の走法を分析した実験によれば、荷物を担いだ状態での飛脚の走法は現代的な走法と比べて運動負荷が高く「効率の悪い走法」と結論づけられた（木戸康裕・小木曾一之「飛脚の走法とその走力」『体育の科学』55巻8号、2005.8、p.648）。ただし、飛脚の片踏みの走法が、彼らが職能として習得した特殊な身体技法であったとすれば、異なる生活様式を持った現代人を被験者とする実験では、その走法の真意までは解明し得ないといわねばならない。
 - 35) 「飛脚は石を踏まない」『上毛俗話 第八集』上毛古文化協会、1953、p.1
 - 36) 川田順造『運ぶヒトの人類学』岩波書店、2014、p.116
 - 37) 織田淳太郎『ナンバのコーチング論』光文社、2004、p.156

- 38) スタール「山陽行脚」(1917) 山口昌男監修『お札行脚』国書刊行会, 2007, p. 295
- 39) スタール「山陽行脚」(1917) 山口昌男監修『お札行脚』国書刊行会, 2007, p. 295
- 40) 喜田川守貞「守貞謄稿」宇佐美英機校訂『近世風俗志(五)(守貞謄稿)』岩波書店, 2002, p. 241
- 41) スタールの見聞が、箱根の山越えの場面であることには注意が必要である。石畳が敷かれ急峻な山道であった箱根山中では、一步ごとに杖を突き立てて登ることが当を得た動作であったと考えられるからである。したがって、駕籠かきは平地では息杖を地面に突き立てるような動作は必要なかった可能性がある。図6をはじめ、平地での駕籠運搬を描いた浮世絵の多くは、駕籠を吊るした棒を握る手に息杖が挟み込まれ「杖」としての機能は発揮されていないように見えるからである。
- 42) 武智鉄二「身体行動論—歌舞伎論序説—」『定本武智歌舞伎①歌舞伎I 武智鉄二全集第一巻』三一書房, 1978, p. 177/武智鉄二『舞踊の芸』東京書籍, 1985, p. 149
- 43) 高取正男『日本的思考の原型—民俗学の視角—』講談社, 1975, pp. 130–132
- 44) 川田順造『運ぶヒトの人類学』岩波書店, 2014, p. 117
- 45) 柳田國男「棒の歴史」『なぞとことわざ』講談社, 1976, p. 139
- 46) クライトナー「東洋紀行」(1881) 大林太良監修, 小谷裕幸・森田明訳『東洋紀行1』平凡社, 1992, p. 237
- 47) 柳田もこの休息方法に触れて、以下のような見解を示している。
「越中越後などのボッカ（荷物を背負って山越えする労働者—引用者注）たちは、太い野球の棒のような、頭が撞木になりもしくは二股になったものを杖に突いていて、休む時にはそれで背の荷を支える。それを荷股ともニンボウとも、またニズンボウともいろいろの名で呼んでいる。」(柳田國男「棒の歴史」『なぞとことわざ』講談社, 1976, p. 119)